

*敬称略

文責 村尾

シンポジウムは2011年9月1日・2日の2日間開催された。第1日目は、まずJSPS ナイロビ連絡センター長の白石が開会のスピーチをおこなった。つぎに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の椎野が、フィールドワークのアプローチや手法を取り上げる本シンポジウムの背景や意義、目的、セッションごとのテーマについて説明した。

シンポジウムは第1日目に3つのセッションと討論、2日目のセッション4と討論、および総合討論によって構成された。全体の司会進行は白石と椎野が交代でおこなった。各セッションでは2つまたは3つの研究発表がおこなわれ、各発表に対する質疑応答がなされた。以下では各発表の内容をごく簡単に紹介する。（詳細はアブストラクト集参照）

9月1日のセッション1「**Being Together with Researchers**」では、具体的な事例からフィールドワークにおける調査助手の役割と存在意義を検討することによって、今日におけるアフリカ研究の展開を捉えることを目的とした。初めの発表者・ウガンダマケレレ大学社会学部出身のMike Obbo Olokaは、同国で調査研究をすすめる神戸大学・梅屋の調査助手である。Olokaは梅屋が調査を実施した地域に住む「ホスト社会の一員」ではなく、他の地域出身であったが、梅屋が調査対象とする民族集団の言語を話すことができる。そうして調査を手伝うことになったOlokaであるが、発表では彼がいかに調査者（梅屋）と現地社会とを仲介することで、梅屋の生活方法や儀礼への参入がon-sightで編み出され、また民族誌記述のためのデータとして加工されたかを示した。次に白石とその調査助手Kiprotich Solomonが、ウガンダで調査者（白石）／調査助手（Solomon）／調査対象の村人との日常的なインタラクションをフィールドワークにおける社会的プロセスとして検討した。Solomonは、白石が財産や土地をめぐる個人・世帯の社会関係や問題について、村人へどのように率直な質問をしたかに言及した。また現地社会で「新参者」たる調査者白石のそうした振る舞いに対し、Solomonが村人から個別に質問を受けたことを説明した。例えば撮影した写真の売買や聞き取った質問を誰に見せるのかなど、不信感を伴う村人の質問へのSolomonの対応が述べられ、Solomonの対応による村人の理解と受容、そして時として村人が調査者を利用しようとする姿勢をもつこと等が示された。またSolomonは、時として白石とのフィールドワークで考えた独自のアイデアを白石に伝え意見を交換したことにも言及した。2人の発表を通じては、まず、調査者がフィールドワークの手法をふくめたアプローチを現地で直接創出することに、調査助手が大きく関与する点について指摘できる。また調査者が現地社会に包摂されていく社会的プロセスは、村人／調査助手／調査者間での双方向的な影響によって特色づけられていくことが具体的に明らかとされた。

セッション2「Exploring Ways of 'Joint' Research」では、アフリカと日本それぞれの異なる専門分野にある研究者が、どのように共同研究をおこなうことができるかについて探ることを目的に、研究内容や研究環境について紹介する発表で構成された。焦点となったのは、いかに現地の人びと／社会にアプローチするか、また共同研究のために研究者同士がいかにフィールドワークにおける工夫や計画立案を共有するかであった。椎野の発表は、椎野がフィールドワークをはじめて以後いかにホストファミリーや調査助手を変更したか、その経緯と調査テーマとの関わりにも触れながら椎野のフィールドワークの歴史が紹介された。それはまさに、フィールドワーカー・椎野が現地の人びとの個性と向き合い、また彼らのライフステージや社会関係のなかで流動的関係を築きながら調査テーマに取り組むという一連の取り組みが示されていた。また椎野はその過程で知り合ったアフリカ研究者と共同研究を進める構想についても説明し、日本とアフリカの研究者による共同研究について、今後の多様な展開のありかたを示唆した。椎野とともに発表したジョモケニヤッタ農工大学の Charles Ndegwa は、近年椎野とナイロビの都市形成の歴史をいかに可視化し提示できるかについて、GIS を用いて検討してきた。彼は発表のなかでこれまでの研究を紹介しつつケニアの研究環境の問題点を指摘した上で、日本のアフリカ研究者に特徴的なフィールドワークによるアプローチやマイクロレベルからの視点を取り入れる重要性や利点を述べた。3人目の発表者は、残念ながら今回のシンポジウムにこられなかったマケレレ大学の Sylvia Nanyonga-Tamusuza である。大門が彼女の原稿を代読した。Sylvia は先行研究における民族音楽学と音楽人類学におけるエティックおよびエミク的な観点からのアプローチに注目し、知識創造の領域における民族中心主義の問題点を指摘した。そして国際的かつ学際的な共同研究が、異なる音楽文化を研究する者によるアフリカ文化研究への新たな視点を付与する可能性を提示した。同時に、彼女はアフリカ内外の研究者との共同研究を行うための対話の場の少なさを指摘した。3人目の発表者である大門は、ウガンダの首都カンパラで調査助手を伴わない自らの調査について詳細に報告した。彼女は自身がカンパラの若者らとともに、若者文化／サブカルチャーであるカリオキ・ショーの出演者となり、日々のショーを共に創造していた。カリオキ・ショーが現代の若者たちのゆるやかな関係に特徴づけられる点に注目する大門は、調査者もその関係の網に一構成員として入り、ゆるやかな関係と文化創造との関係を検討する調査手法の重要性を示唆したといえる。

セッション3「Viewpoints of Japanese Researchers」では、日本人研究者によって示される様々な立場からのフィールドワークの見方や手法について、アフリカ研究者と議論することを目指した。ザンビア西部で自主的定着難民やキャンプで暮らす条約難民の調査を実施してきた村尾は、アフリカ難民の実態に即したフィールドワークの方法を農村での調査手法、多様なアクターとの関係構築からいかにくみたてたかを紹介した。そして日本で醸成されてきた生態人類学的な農村調査のアプローチや手法が、難民に関わるアフリカ社会の基礎研究に有効となる可能性を示唆した。2人目の発表者である波佐間は、ウガンダ・カラモジ

ヨンの牛の歌に使われる詩とリズム、トーンについて録音資料とそこから採譜した楽譜とともに紹介することで、それら牛の歌が彼らの生活世界へいかに統合され、その創造的なビジョンを介在しているかを検討した。そしてその分析手法が、従来の文学研究にみられるイデオロギー的アプローチとして有効となることを示した。

1日目最後には、ナイロビ大学の **Tom Ondicho** が、ポストモダンの時代にある現代において、日本及びアフリカ研究者の研究背景やアプローチにおける同時代性をそこなわず、いかなる共同研究が可能となるかを問う示唆的なコメントを述べた。しかし残念ながら、終了予定時間を大幅に超過していたため、フロアでの議論を2日目の総合討論にもちこすことでこの日のプログラムを終了した。

9月2日(日)2日目のセッション4「Approaches and Methodologies of Ethnobiological Research in Africa」では、ケニアおよびウガンダにおけるエスノボタニーの研究とその発展の在り方に注目して、生態人類学の手法を用いたフィールドワークの可能性を検討した。ウガンダでバナナについてエスノボタニーの視点から調査をすすめてきた佐藤は、これまでの現地でのバナナの認識や栽培技術の多様性のみならず、そうした研究を進める日本・アフリカの研究者や機関を紹介した。そして文理融合の視点をもつエスノボタニーから国内外でのアフリカ研究に寄与していく可能性に言及した。またマケレレ大学の **Richard Olwa** は、生物多様性や食糧の安全保障の観点からみた在来の食用果実に関する研究の重要性を指摘した後、ウガンダはチェグレでの食用果実の分布や利用について民族植物学的観点から報告をおこなった。そしてアフリカと日本で共に在来の食用果実に関する研究蓄積が薄いという事実を共有し、研究を推進することを提言した。3人目の発表者である **Oliver Wasonga** は、ケニアはカジアド地域のマサイコミュニティを対象として薬用植物の知識、認識、および探索と保護の実践を報告した。それを通じて、薬用植物の利用が活発ともいわれるマサイコミュニティにおいては、知識の共有体系や分類、認識体系が非常に多様であることが明らかとされた。同時にエスノボタニー分野での共同研究計画にあたり、重要な指標の設置を示唆した発表であったといえる。

セッション3に対し、長崎大学の波佐間はこのシンポジウムの重要なキーワードでもある「学際的研究」としてのエスノボタニーの研究手法に言及した。それは今日進められるアフリカ研究において、フィールドワークが多様な分野に展開するなか、アフリカ研究のなかで脱人類学中心的な視点をいかに発展させ、今後のアフリカの学会発展が可能かを問う指摘そのものだったといえる。

総合討論では、デイスター大学の Mike Kuria が、1) 調査助手の役割を含め、長期滞在 (over-stayed) 時にみられる多様なアクター間の相互的で深い社会的プロセスについていかに議論を深めていくか、2) 多様な調査手法とアプローチを列挙した本シンポジウムを通じて、フィールドワークが現地の多様で流動的な社会関係の網の目のなかでおこなわれることが浮かび上がったが、だからこそ調査者が直面する困難な側面とその克服にむけた課題をどうするか、3) 質問内容の検討や言語習得・ドキュメンテーションの欠如という課題等を列挙し、本シンポジウムでえられた成果や問題の整理をおこなった。

ここで本シンポジウムの目的を振り返ると、本シンポジウムはフィールドワークをおこなう日本人とアフリカ人研究者が互いのアプローチや方法について事例を列挙し、その差異や共通認識を確認すること、そして今後の共同研究のありかたを探る試みとすることを目的とした。そのため総合討論では、上記に挙げた Mike Kuria の問題提起に統一／総合された回答を出すための議論がおこなわれなかった。フロアからは上記に提起された問題について議論するための会合や文書資料蓄積、ウェブサイトを使った on-going の情報共有サイトなどの基盤整備のあり方について、アフリカ人研究者から意見が出された。

最後に、Tom Ondicho や Mike Kuria は、ポストモダンの時代にフィールドワーカーがさらに調査方法を検討すべく取り組みを続けなければならないこと、また調査方法も多様化しているが共通の問題意識や困難、可能性をもっていることを指摘して、本シンポジウムは幕を閉じた。